

世界平和パゴダ

関門海峡を見下ろす和布刈山の高台に、日本で最も特徴的な建造物のひとつ、門司の世界平和パゴダがある。高さ 27 メートル、幅 13 メートルのこの建物は、日本で唯一公式に認められたミャンマー式寺院である。

1958 年に建てられたこのパゴダは、第二次世界大戦（1939-1945 年）中にミャンマー（当時はビルマ）に派遣された元軍人、市原瑞麿（1917 年生まれ）が構想したと言われている。戦争の死と計り知れない苦しみを目の当たりにした市原は、戦争の犠牲者を悼み、世界平和を促進するために、日本にテラワダ仏教の仏塔を建てたいと考えた。

1957 年、ミャンマー屈指の仏教僧マハシ・サヤドー尊師（1904-1982）が来日した。彼は後にウケミンダ尊師（1922-2011）として知られる若い弟子を連れていた。市原の構想を知ったこの僧侶は、プロジェクトを支援するために日本に残ることを志願した。

第二次世界大戦戦没者慰霊碑

第二次世界大戦中、約 200 万人の日本兵が門司港を經由して太平洋戦線に派遣され、約 20 万人がビルマ戦線（1942-1945）に参加した。出征した時に兵士達は、二度と戻ってこられないかもしれないと思っていたに違いない。ビルマでの日本軍の死傷者は数十万人にのぼり、少なくとも 18 万人の日本国民がビルマで死亡し、祖国に帰れなかったことが後に判明した。幸運にも帰国できた人々にとって、門司は喪失、生存、そして戦争による究極の悲劇の象徴として深い意味を持つようになった。

ビルマの民間人にもまた、ひどい犠牲者が出た。正確な数を特定するのは難しいが、占領していた日本軍の犠牲者数を遥かに凌ぐものであったことは明らかである。最終的に戦争が終結したとき、このような大きな暴力のトラウマが両国に重くのしかかった。敵対関係が終わってからわずか 13 年後にこのパゴダが作られたことは、相互の親善を確立するための小さな一歩であった。

1958 年 9 月、パゴダはミャンマーの建築家の指揮のもと、地元の大工たちによって建てられた。総工費は 4,000 万円で、ミャンマーのブッダ・サーサナ評議会と地元門司の寄付金で折半された。

パゴダには、ミャンマーから少なくとも 3 人のテラワダ僧が常駐している。運営資金は、元兵士や戦死者遺族からの寄付と、ささやかな入場料で賄われている。残念ながら、現在パゴダはかつてのような支援を受けておらず、門司市民の善意と慈善活動によって維持されている。

パゴダ内部

パゴダは典型的なビルマ風デザインとなっている。祭壇中央の仏像は、歴史上の仏陀であるゴータマ・シッダールタ（日本名：釈迦如来）をテーラワータ教で表現したものだ。その左側には、戦死した兵士のための 50 の位牌が置かれている。ミャンマーの浜辺にあった素朴な石は、悲嘆に暮れる多くの家族が愛する人の遺骨と再会できなかったことを厳粛に思い出させる。毎年秋には慰霊祭が行われる。